鷲と鮹

（古風土記から）

東京女子高等師範學校教諭兼教授　石井庄司

一

出雲國風土記、嶋根の郡、蜷蟡島に左のやうな古老の話が傳へられてゐる。

「出雲の郡杵築の御崎に、蜷蟡ありき。天の羽羽鷲掠り持ち飛び來て、この島に止まりき。故、蜷蟡島といふと。今の人猶誤りて栲島となづくるのみ云々。」

「天の羽羽鷲」は、羽の廣く大きな鷲といふ意味であらう。古事記、上卷に「天之波波矢」といふのがあり、また日本書記、神代卷に「天羽羽矢」とあり、舊事紀、天孫本紀にも「天羽羽弓、天羽羽矢」といふのが見える。古事記傳に、「波波矢」は「波張矢」の意味で、「羽の廣く大きなるを云なるべし」とある。それによれば、天羽羽鷲も同樣に解釋して差支なからうと思はれる。なほ古事記の「羽羽矢」は一說に、「空氣を切つて飛んで行く矢の意」といふのがある。それによれば、空氣を切つて飛んで行く鷲といふことになるであらう。ともかくも、こゝでは一羽の鷲が飛んできて鮹をさらつて持つて行つたといふのである。たゞそれだけで、主題は地名の說明傳說である。

ところが、出雲國風土記の本文には、これに次いで蜈蚣島のことがあり、「蜷蟡島にゐた蜷蟡が、蜈蚣を食つて、此の島にきた。それで蜈蚣島といふ傳說を載せてゐる。鷲と鮹と蜈蚣と三者の組合はせが、面白いと思つたので、一つの話を作つてみた。全くナンセンスな話である。鳥や獸と多くの動物を次々に引き出して、追つかけるといふ話は、岸邊福雄先生のよい話がある。それらからも御蔭を被むりながら、自由に、想像にまかせて書いてみた。餘り貧弱で我ながら恥しい代物である。

たゞ筆者は、此の小話を書いてゐる中に、明治二十六年シカゴ萬國博覽會に出品せられ色々の話題を投げかけた高村光雲作の名彫刻「猿」を思ひ起させた。もぎ取つた鷲の羽を前足に踏みつけて空の彼方を見つめる猿の姿は、昨年の冬、復興された上野博物館に出陳されてゐる。鷲はロシ

ヤの象徴とか。この話の子蟹や鮹にも何か現時の國際關係が象徴されてゐると見るのは、あまりにお話の世界を冒瀆するものであるかも知れないが、また一面さういふことにも思ひ及ぶのである。しかし子供には決してそんなことを考へさせてはならぬことは申すまでもない。

たゞ本話は、餘りにまづしく、このまゝでは到底話せないものと思ふ。大方の寛恕を乞ふ。

二

ぽかぽかと、暖かい日のおひるすぎ。

かはいゝべに色の子蟹が、ひとりでちよろちよろと、濱邊へ出て來ました。

「おゝ、暖かい。いゝ氣持だ。」

といつて、砂の上に横になつてゐますと、すぐ、こくり、こくりとゐねむりをはじめました。

風はそよ〳〵と吹いて通ります。海の波は、たらつた、たらつたと、子守唄をうたつてゐます。子蟹は氣持よさそうに、すや〳〵と寢てゐました。

そこへ、海のたこ入道が、八本の足を立てて、のそり、のそりと散歩にきました。

「いゝお天氣だな。よい、氣持だ」

といつて、歩いて行きますと、寢てゐる子蟹を踏みつけてしまひました。

「唯だ！ぼくを踏みつけるのは」

といつて、子蟹は二本の鋏をふり上げて、たこ入道の足に嚙みつきました。

おどろいたのはたこ入道です。「痛い、痛い」とびあがりました。それから「助けてくれ！大へんだ」といつて、大きな頭をふりたてながら、逃げて行きました。

此の樣子をみてゐたのは、鷲です。一度にブーンと急降下をして、濱邊へ飛んできました。そして、大きな爪で、たこ入道をつかみ上げると、すぐ空に舞ひ上りました。子蟹はまだ一生懸命、たこ入道の足に喰ひ付いてゐます。

わしは、遠い島の岩の上に降りて行きました。そして「おいしい御馳走になりませう」といつて、たこ入道と蟹とを見てゐました。そこへひよつこり出てきたのは、大きなお猿です。キャッと一聲鳴いて飛びかゝつて行つたと思ふと、すぐに鷲の羽をもぎ取つてしまひました。そして、たこ入道と子蟹とを海へにがしてやりました。